

to the beginning

永井大輔

一、

あらゆる出来事には始まりがある。これは一つの出来事の始まりに至る物語。

丘の上には塔があった。町はずれの丘の上に、誰かが使っているわけでもなく、誰かが近寄ることもない、誰が何のために建てたのかもわからない塔である。皆の視界に入るのに誰も興味を抱かない。そこにあるのにそこにはない塔。今にも消えそうな透明な塔。灰色を基調としているせいか余計に儚げに見える。この塔で起こることを知る者はいない。知る必要もない。ただ一人以外は。

一人の男が塔を背に立っている。誰も寄らない塔の前、呆然と立ち尽くす男の姿。歩を進め、あと一步で命を落とせる位置に立つ。自分の村を一望できる位置に立つ。

彼は娘と妻を亡くし独りとなった。彼が幼いころから続く戦争が終わり、国は一時の平穏を取り戻した。国は繁栄し、街には食料が溢れ、人々は豊かな生活を送るようになった。黄金色に輝く時代。しかし、国がどれだけ変わっても世界の理は変わらない。人の命には終わりがあること。単純にして当然の理。家族を失った彼は死という事実に向面す

る。

彼の人生は 決して楽ではなかった。戦時中の困窮で親に捨てられ、捨て子同士で作られた集団に入った。争いの隙を見て食料を盗み、常に命の危険にさらされる綱渡りのような生活。彼は綱から落ちていく多くの仲間を見た。彼自身、何度も綱から落ちそうになった。彼には優しさや責任感があった。一人でも多くの仲間と綱を渡りきるために彼は尽力した。そうしているうちに戦争が終わった。彼は十八となっていた。争いが終わった後、彼は同じ捨て子仲間の女性と結婚した。娘が生まれ、捨て子だった彼は家族というものを初めて実感することができた。初めて訪れる夢のような時間。真白に輝く日々。

しかし、二人はもういない。最愛の二人は病によって容易く奪われた。

人々に忘れられた丘に立ち、透明な塔を背景に、深くため息をつく。この先どう生きていくのか、一人となった人生に意味などあるのか、と考えながら彼は住んでいた村を見下ろす。丘の上から見下ろす村はとても小さく見えた。早朝だからであろう、人の姿は見当たらない。

「何故、私はこんなにも虚しくなるのだろうか」

彼は考える。娘と妻を、家族を失っただけだ。幼いころに経験したことだ。脳裏を覆う灰色の記憶。親の顔は忘れた。共に暮らした記憶はあるが、顔はもう覚えてはいない。失った悲しみと助けることができなかった無力感が織り交ざり、彼は虚無感に襲われる。

「人と出会うから・・・」

彼はポツリと呟く。降り始めた雨のように言葉が溢れ出る。

「出会っても別れがあるだけだ」

彼はそう吐き捨てる。

そこに、

冷たい白い声が響いた。

「その二つの間に幸せがあるのですヨ」

ずれた白い声が彼の鼓膜を叩く。

我に帰った彼が振り返ると、誰もいないはずの場所に人がいた。フードを被った女だった。顔は見えないが声は白く細い女性のものだった。

彼女は続けてこう言った。

「貴方の家族を生き返らせてあげましょうか？」

二、

彼は一瞬、戸惑った。しかしすぐに我に返り、女に「どういうことだ」と訊き返す。

「言葉のとおりですヨ」と女は白い声で淡々と返答する。

「貴方の家族を生き返らせて差し上げます」

彼の眼に生気が戻り、女に飛びつく。

「本当なのか！」と凄じ剣幕で女に向かって叫ぶ。

普通、こんな突飛な話は信じないだろう。しかし、絶望し疲れ切っていた彼にはどんな妄言でも信じるに値した。全てあきらめたからこそ、どんなことでも信じられる。たとえ嘘でも今の彼には関係ないのだから。

「一つ条件がありますけどネ」と女。

「どんな条件だ」彼は問う。数分前とはまるで別人である。

女は背後の塔を指さして

「この塔で貴方の一生を終えて下さい」

平然とそう言った。

彼には言葉の意味が分からなかった。そんなことをして何になるのか、そもそも、塔から出ないでどうやって生活するのか。色々な考えが彼の頭を駆け巡る。

「詳しく、話してくれ」  
頭を整理し、やっとのことでバラバラの言葉を紡ぐ。

「貴方の体を理から外れたものにします。塔の一室に座るだけで生き続けられる体です。そこであなたの寿命が尽きるまで座り続けてください」淡々と述べる。

「なるほど」

彼は一呼吸おいて、

「もし、約束を破ったらどうなる？」

と質問する。

「それは破った時のお楽しみですよ」

女は相変わらず白く平坦な声で言う。

彼の質問は軽く流された。

「ああ、ですがご安心下さい。塔から出られなくてもご家族の様子は御覧になれます

ヨ。鏡があるのでス」

彼の聞きたいことを女は見抜いて先に提案してくる。

「鏡？」

「そうです。世界を見渡せる鏡です。貴方の望んだ場所を映し出しますヨ。貴方の家族の元気な姿もネ」

「貴方の家族の生活も保障しますヨ。私がしっかりとサポートします」  
そのまま女は続けて言う。

「迷う必要はありません」

「貴方はもう死ぬつもりだったのでしょウ？」

彼の足元を見て、全て見透かしたように女は詰め寄ってくる。

沈黙。思考。静寂。深く暗い、海の底のような静けさ。

「迷う必要はない」彼の中で反芻される言葉。

女の言う通り、彼は人生をあきらめていた。このまま独りで生きることはいできない。新しい家族を作ろうとも思わない。どうせ、今捨てようと思った命だ。

それなら、元気に暮らす娘たちを遠くから見守りながら生きたい。たとえ塔から出られずとも、家族の姿が見られるなら。

彼は、女の方へ一歩近づいた。  
相変わらず、女の顔はフードで見えないが、どこか楽しそうに見えた。  
声は相変わらず白く、淡々としていた。

三、

目の前には、鏡があった。そこには私の望んだ世界があった。凛々しく美しい妻、幼く可愛い娘。ただ一つ、私がそこにはいないということを除いては理想の世界だった。私の身の丈ほどもある鏡。一步踏み込めば理想の世界に私も入ることができるのでは、と思ってしまう。そもそも存在しえない未来を変えたのだ。理を捻じ曲げたのだ。塔にいるのはその罪を償うため。そう考えると、ここにいるのも悪くはない。当然の罰なのだから。もう二度と見る事ができないはずだった笑顔が見られる。それだけで十分だ。

「ふう…」

ため息一つ。部屋を見渡す。

つまらない部屋だった。荒んだ灰色一色のモノトーン。窓も一つも見当たらない。光が入るはずがないのにどことなく明るさが残る。薄暗い何もない部屋。あるのは私が座る肘掛け椅子と鏡だけ。私が入ってきたはずの扉もいつのまにか消えていた。初めから外に出す気などあの女にはなかったのだ。部屋全体がドンヨリとしているせいかな、縁取りが金色の鏡は一層輝いて見える。いや、私の希望を映す鏡だから輝いて見えるのだ。この鏡が私の世界の全てだ。

「ふう…」  
再びため息。不服な点が多い。しかし本懐を遂げることはできたのだ。もう一度部屋を見渡して、

「これでよかった」

半ば自分を納得させるように私は呟いた。そのまま椅子に腰を掛け、再び世界に目を向けた。

#### 四、

異変に気が付いたのは一か月ほどたってからだ。体に変化が全くおこらないのだ。髪の毛は伸びない、爪も伸びない、体も汚れない。座っているだけで生きることができる体にするとはこういうことだったのか。私はそのように納得していた。しかし、時間が経つにつれて私は不安を覚えた。鏡に映る娘や妻の姿は変わっていくが、私の姿は全く変わらないのだ。塔に入ったときと変わらない三十代の私。恐怖が私を覆う。

時が経つにつれ、私の不安は確信に変わっていった。この世の理から外れた体。あの女が言っていたことが脳裏をよぎる。そして、理から外れた体がどういふものなのかを何となく理解した。それでも私は残された家族の成長を鏡から見守ることはできた。私がおどんな姿になるうが関係ない。私の願いは家族を見守ることなのだ。それさえ叶えば他のことはどうでも良いのだ。

ああ、娘がまた転んだ。元気だなあ。

ああ、妻の料理は健在だな。とてもおいしそうだ。いつも私の好みに合わせて作ってくれたが今はどうだろう。やはり娘の好み合わせているのかなあ。

ああ、また娘の身長が伸びたみたいだ。

ああ、妻は体が動きづらくなってきたのか、もう結構な年だからな。

ああ、子どもの成長は凄いな。あの喧しい娘がこんなに落ち着いた女性になるとは。

ああ、年老いても私の妻は美しいよ。

ああ、娘が男と結ばれた。私のようなしつかりした男だろうか。

ああ、妻はとても幸せそうな顔だ。でも、やっぱりどこかさびしそうだなあ。

ああ、娘は幸せそうだ。

ああ、妻も幸せそうだ。

私も十分に幸せな人生だったよ。

そして、

妻が死に、娘も死んだ。

私の体が人間のそれでない以上、家族が死んでも私は共には死ねない。そんなことはわかりきっていたことだ。まだ、娘の子ども、私の孫は生きている。が、私にとっては赤の他人のようなものだ。理由はわからないがまったく興味がわかない。

途端に虚ろとなる私の心

そして、私は、これからのことを考える。

老いることも、死ぬこともない身体。ただ座り続けることに苦痛を感じない精神。

家族が死んだ以上、生きる理由もない。

目的もなく只、座して、世界を見るだけの、終わりの、見えない、人生。

「——ッ！」

私は声にならない悲鳴を上げる。

これからどうするのか、何を糧に生きればいいのか、頭が真白になり、私は椅子を鏡に投げつける。不思議なことに鏡は傷一つつかなかった。

「はあ、はあ……」

暴れたことで息が切れる。自分の息が切れるのを感じ私は思いつく。

己で自らを殺めればよいのではないか。娘たちが天寿を全うした以上、私がこれ以上生き続ける理由もない。理由なく生きることなどできなう。

ただでさえ、私は常人よりも十分に長く生きた。

呼吸を整えよう。時間を置こう、それから死ぬことにしよう。覚悟は決まっている。

しかし、私は死ぬことができなかった。幾度体を傷つけても、痛みを感じるだけで体は元にもどる。どこから現れたのかわからない塵芥が私の傷を覆い元に戻す。苦しいだけで何にもならなかった。死ぬことはできないと判断した私は壁を壊し、外に出ようと考えた。塔から出たら何が起こるかわからない。しかし私には生殺しの現状よりつらいことなど考えられなかった。椅子を壁に向かって勢いよく投げつける。グアンと嫌な音が私の耳を突き刺す。激しい音に反して壁はびくともしない。それ以前に、木の椅子が明らかに自身よりも固いはずの石の壁にすごい勢いで当たっても傷一つつかない。そもそも何十年もの間使用された木の椅子が全く朽ちていない時点でおかしかった。

私はこの部屋自体がこの世のものではない。この世の理から外れているということに悟った。

死ぬこともできず、外へ出ることもできず、ただ、この部屋から世界を見る。永遠に続く苦しみを受けとった私は自分をどうすればよいのかわからなくなっていた。

行間

どこでもないばしょにそのおんなはいる。  
おんなはあるきながらかんがえる。

いつ生まれたのかわからない。  
気づいた時には塔があった。

自分の役目は塔の人柱となること。  
その意識しかなかった。  
永い永い時を塔とともに過ごした。

しかし、あるとき、ワタシの中で何かが切れる音がした。  
役目の放棄。

ワタシは代わりの人柱を探し始めた。  
そして遂にあの男が現れたのだ。

家族の蘇生と引き換えに、私の役目を引き継いだその男は今頃後悔しているかもしれない。



しかし、ワタシには関係ない。

「後は頼みましたヨ」

どこでもないばしょにおんなのこえがひびく。

五、

あれからどれだけの時が経ったのだろう。鏡の中の季節は、何度も何度も移り変わった。権力の興亡、新たな文明、文化の変遷。服装や住居も私が「ヒト」だった頃と大きく変わった。様々な人間が争い、国のかたちも大きく変わった。

ただ椅子に座り鏡を眺め、世界の様子を傍観する日々。世界は、喜び、悲しみ、怒り、私が失くしてしまった喜怒哀楽をくつきりと映し出した。最初は見たことのない世界に驚きや憤り、羨みを感じた。しかし、それも一時のこと。時間が経てば経つほど自分が何者かわからなくなり、ついには何も感じなくなってしまった。何も起らない日々。浸るうちに自分が透明になったように感じた。いや、長い時間が経つことで本当に透明になってしまったのかもしれない。

気が付くと私が見ているものは世界ではなく塔の一室になっていた。部屋を見下ろす私。

永い時間を経て私は塔の一部と成り果てた。

今日も誰かが塔に入ってくる。その人間も取引をしたのだろう。私にはもう何も感じることができない。しかし、私の中に残った感情が一つ。

“苦痛”

塔で永遠を過ごす苦しみだけは私の中に残っている。そして、その感情から一つの動きが私に生まれる。

それは死という形の救済。

この塔に幽閉された者の人生を終わらせる。

終わりのなくなつた人生に一つの呪いをかける。ここから出たいと思つたときに降りかかる呪い。朽ちぬ肉体から魂を開放する呪い。

「死」は私にとって最も苦しいことではなかつた。望みを果たし、生きる理由のない世界で生き続けることこそ私にとって最大の苦痛だつた。

だから私は救済する。

今日もまた、私は殺めることをやめない。

六、

バキン

古びた塔の中で鏡が割れる音がした。

それは命が終わる音。

願いが叶い、全てが満たされ、なお生きねばならない者に与える最期の音。織物は飛び散り、枯葉のように舞い落ちる。割れた鏡はまるで蜘蛛の巣。

「あの呪いが私に降りかかったのだわ」と機を織る女は叫んだ。

アーサー王研究会創作文庫

to the beginning

著者 永井大輔

2014年 1月 15日 発行

発行人 不破有理

発行所 慶應義塾大学教養研究センター

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学来往舎1階 代表 045-563-1151

©2014 NAGAI, Daisuke Printed in Japan

非売品















